

南アジアのアーリア化

山崎元一

インド世界、あるいは南アジア世界をどう捉えるかという問題を提起するにあたり、伝統的なヒンドゥー社会を「上からのアーリア化」という視点で話してみたい。インドは外から見ると、孤立した一つの世界のようにも見える。だがそこには山や川などの自然の境界で区切られたいくつもの単位が存在しており、それが政治的単位となったこともあり、それぞれの地域で独自の文化を生み出してきた。このインド亜大陸は面積でもロシアを除いたヨーロッパに相当している。いわば、インド亜大陸の中には、ドイツやフランス、イタリアのような様々な国が存在しているのである。だが、そのような境界を越えた文化の伝播や人の移動という交流があり、最終的には外から見れば「ヒンドゥー世界」という同質的な世界が次第に形成されていくことになる。

中国の歴史は統一王朝が次々に興るのが特徴だが、インドの場合は地域ごとに独立した王国が存在するのが常態で、統一はむしろ異常な状態とも言える。ナルマダー川とヴィンディヤ山脈を境に、インドは北と南に大きく分けられているが、南北を統一した王朝は、古代ではBC 300～200年頃のマウリヤ帝国だけだと言ってもいい。これは、当時のガンジス河流域が、他を圧倒する経済力・軍事力・文化の高さを持っていたからこそ可能だったのだろう。ただ、マウリヤ帝国の支配が約1世紀にわたって続く間に、インドの他の地域も経済的・文化的に向上し、帝国崩壊の後にはまた分裂状態に戻ることになる。これ以後、北と南を併せたような統一は、古代ヒンドゥー時代には成立していない。

その後、1300年から1400年頃にかけて、ムスリムの征服王朝であるデリーサルタナットが南下してヒンドゥー王国を次々に倒し、一時的かつ不十分ではあるが南北の統一帝国が成立する。ところがデリーの中央の権力が弱体化すると、小国が独立して分裂状態に戻る。ただそれ以前と違うのは、新たに独立した国のほとんどがムスリム勢力であることだ。その後、インドの南北を併せた形で帝国を成立させたのは、ムガルというムスリムの征服王朝である。1700年頃にムガルの権力が弱体化すると、インドはまた分裂という常態に戻りはじめるが、その方向は阻まれ、イギリスによる植民化という形でインドは再統一されることになる。その後は民族運動の期間を通じて、次第にインド民族という意識も芽生え、強化されて、独立後の今日に至っている。いずれにせよ、歴史的に見るとインドにおける統一王朝の存在は一時的なものでしかなく、むしろ異常な状況だったと言えるだろう。亜大陸は一つにまとまっているののように見えるが、その中では実は非常に多様な世界である。

これについては、7世紀にインドを旅した玄奘三蔵の旅行記『大唐西域記』でも同じことが

記されている。その第1巻では、概念的な世界の説明がされている。須弥山を中央とし、これを取りまく海に4つの島が浮かんでいる。南には臆部洲という我々人間の住む島があり、転輪聖王が現れるときには島全体を支配するが、転輪聖王が現れない今は四主の地域に分かれている。西は宝主の国でイラン世界、北は馬主で遊牧民の世界、東は人主である中国の世界であり、そして南に象主の国のインド世界がある。インドは象主という言葉で象徴されるような南方の統一的世界だと説明されている。確かに外から見たインドは一つの世界なのだろう。

第2巻から第11巻は、玄奘がインドに来てからの話で、実際に中から見れば、亜大陸は多様に複雑な世界だということがわかる。インド世界は中央と東西南北の5つ、すなわち「五印度」に大きく分かれ、この中はさらに70余国に分かれている。玄奘はインド亜大陸全体の特徴と同時に、70余国のそれぞれについて自然・歴史・文化の特色、政治・宗教の様子を書き記しており、カースト制や民族性にも触れている。全体としては天竺という一つのまとまりを成しながら、実際には非常に多様な世界だったというのが、彼が十数年の滞在で得たインドの印象であろう。

今回のテーマであるヒンドゥー世界を成り立たせている諸要素とされてきたものを挙げてみるならば、例えば〈ダルマの観念〉、〈業・輪廻の死生観〉、〈解脱の理想〉、〈浄・不浄思想の発達〉、〈ヴァルナの秩序〉、〈宇宙観〉、〈サンスクリット〉、〈ブラーフミー文字〉、〈王権の発達〉などが挙げられる。

このような要素の多くは後期ヴェーダ時代（B. C. 1000-600）からポスト・ヴェーダ時代（B. C. 600-300）に成立し、形を変えつつもその後に継承されている。このうち後期ヴェーダ時代はバラモン正統派の思想が確立した時代である。地域的にはガンジス河上流域が中心で、バラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラというヴァルナ制度の大きな枠組みも成立し、後の時代まで継承されることになる。

ポスト・ヴェーダ時代には、中心地域は中・下流域に移り、後期ヴェーダ時代に形を整えつつあった王権国家が完成された。専制的な王を中心とし部族的な絆を絶った形の国家である。社会制度では、ヴァルナ制度の一番下に不可触民階層が明確に現れるようになった。文字や貨幣などの使用が始まるのもこの時代である。同時に、バラモン正統派に対する非正統派である仏教・ジャイナ教が、成立し発達していく。

リグ・ヴェーダ時代（B. C. 1500-1000）の中心地であったインダス河流域は、むしろ西方の世界に関係している。歴史上この地域は、西方・北方からインドに入ってくる様々な異民族や異文化をまず受けとめ、その衝撃をやわらげてガンジス河流域に伝えていくという役割を

果たしている。いわばインダス河流域の地に守られるような形でガンジス河流域において、インド的なヒンドゥー文化の基礎が生まれ、ここで成立した古代の文化・経済・社会のパターンは、その後の時代にインド亜大陸に全域に伝播し、それぞれの地で変容を受けながらも、ヒンドゥー社会の基礎を作ってきた。

このようなヒンドゥー世界の形成と伝播に、重要な役割を果たしたのがバラモンの存在である。バラモン文化の伝播はアーリヤ化と言い換えることもできるだろう。インド亜大陸におけるアーリヤ化の進行、変化に焦点を当て、バラモンと彼らの果たした役割について7項目にまとめてみた。

第1は「バラモン・ヴァルナの形成」についてである。先に述べたように、バラモンが一つの排他的なヴァルナとして成立するのは後期ヴェーダ時代である。ヴェーダ聖典には神をも動かす呪術的な力として、中性名詞の「ブラフマン (brahman)」という語が出てくる。このような力を持つ者、すなわち司祭者が男性名詞の「ブラーフマナ (brāhmaṇa)」、すなわちバラモンと呼ばれるようになったのである。司祭者たちは祭祀を手段として神々の世界をも動かすことができると主張し、ヴァルナの秩序の最高位を確保していった。

第2はバラモンが唱えた「ヴァルナ制度のイデオロギー」である。それを要約すれば、次のようになる。①人間社会は人類発生の時点からバラモン・クシャトリヤ・ヴァイシャ・シュードラの4つのヴァルナからなっていた。②この世でいかなる身分に生まれようと、それは前世の行為、すなわち業の結果である。③この世の生まれを宿命として受けとめ、自己のヴァルナの義務 (svadharma) を遂行せねばならない。④それこそが宗教的に最も功德ある行為であり、来世によりよい生まれを約束するものである。

ヴァルナ制度の基礎となるのが浄・不浄思想である。バラモンが最も浄で、下にいくに従って浄性を低めるというランクづけがされている。しかもそれぞれのランクにふさわしい浄性を維持するために、食事その他の掟を守らなければならない。こういうヴァルナ制度をバラモンが唱え、クシャトリヤすなわち王権がそれを支える形で、カースト・ヴァルナ社会のイデオロギーが定着する。これは「上からのカースト化」と呼びうるものである。

さらに四つのヴァルナの下にアンタッチャブル=不可触民という階層が加わる。ガンジス河流域で成立した5つの大きな枠組みのイデオロギー、あるいはこの枠組みからなる社会が、その後、亜大陸の他の地方にも伝わり受け入れられていく。そのヴァルナ制度のイデオロギーの伝播に、バラモンは重要な役割を果たしている。

第3は「王権とバラモンの関係」についてである。本来インドでは祭政分離が原則で、バラ

モンは宗教を担当し、俗世界の問題はクシャトリヤが分担する。バラモンとクシャトリヤがそれぞれ独自の役割を果たしつつ支配階層を形成するのが、ヴァルナ制度の社会である。しかし一方では、国家繁栄のための祭式を執行し、またヴァルナに基づく社会秩序を王に示すのはバラモンの役割である。現実には宗教と政治の両者は密接に結びついていると言える。

王権にとって、地域社会の秩序の維持を図るためにバラモンの存在は非常に重要である。例えば、南インドの王達は、バラモンを北方から招き、彼らに村落や土地を与えて住みつかせることによって、地域社会の秩序を維持させようとしている。それによって耕地の拡大という効果も生まれ、また村に住むバラモンはエリート役人の供給源にもなる。このように社会の指導者としてバラモンを迎え入れる形で、地方のアーリヤ化が進行していった。

第4は「異民族・周縁諸部族のアーリヤ化」についてである。バラモン・クシャトリヤ・ヴァイシャ・シュードラそして不可触民というヴァルナ社会の枠組みに、異民族や周縁の諸部族を編入させる時には様々な正当化がなされる。「ヴラーティヤの理論」もその一つである。『マヌ法典』の中には、バラモンの指導に従わなかったために墮落して、シュードラの地位に落ちてしまったクシャトリヤ、すなわちヴラーティヤとして、チョーラ人やドゥラヴィダ人などの南インドの諸民族の名前が出てくる。彼らはバラモンの指導を受け入れ、バラモンの願うような祭式を執り行い、バラモンを保護するならば、本来のクシャトリヤの地位を取り戻すことができるというのである。「ヴラーティヤの理論」は、異民族を「復帰させる」という形でヴァルナ社会に編入させることになる。

混血の理論も重要である。ヴァルナ社会の結婚は、本来は同じヴァルナの内部でなされねばならないのであるが、この原則はしばしば破られ、ヴァルナ間の混血が生ずる。この混血には、ヴァルナの高低によって、また男のヴァルナが高いか（アヌローマ、準合法）女のヴァルナが高いか（プラティローマ、不法）によって、上下の差が生ずる。さらに、異なった混血族間の結婚によって、ランクを異にする混血族の数は無限に増えることになる。この混血理論が、アーリヤ社会の周縁部の異民族や諸部族を同社会に編入するに際して、利用されることもある。すなわち、編入される部族にふさわしいランクが、この混血の理論で説明されるのである。

ヴラーティヤの理論と混血論は、このように、異民族・周縁諸部族のアーリヤ化を促進し、インドに入ってきた民族をヴァルナ社会に組み込む上で重要な役割を果たしている。バラモンはこのような理論を駆使しながら自分たちの居住域を広げ、その結果、ヴァルナ社会の枠組みは亜大陸のほぼ全域に伝播していった。

第5に「理想と現実」の問題がある。現実の世界にはヴァルナ社会の理想として掲げられた

原則に反する様々な問題が起こる。したがって、ヴァルナ社会を維持するためには、理想と現実の間の溝を埋めなければならない。例えば、原則として婚姻は同一ヴァルナ内のみ認められる。ところが現実には様々な混血が起こる。このような混血を全て認めることによっても、全て排除することによっても、ヴァルナの枠組みは崩壊してしまう。それを阻むために編み出されたのが「アヌローマ論」で、男が上で女が下のランクという組み合わせの場合、準合法とされ、生まれた子供は男の家族の一員となることができる。

また、各ヴァルナの従事する職業は、浄・不浄の観念に基づき厳格に定められている。例えばバラモンの場合には司祭職、教育職が本来の仕事だが、実際にはそれで生活していけるバラモンの数は限られている。このような事態に対処するために考案されたのが「窮迫時の法」である。それによれば、生活が維持できないような窮迫の場合は条件を緩め、他の低いヴァルナの職業に就いてもよいとされる。また、バラモンの宗教からシュードラは排除されているが、窮迫時という状況であれば、シュードラに宗教的なサービス、教育を授けることが許される。こうした窮迫時法によって、本来ならば不法行為によってヴァルナから追放されねばならない者たちが、それぞれのヴァルナの枠組みの中につなぎ止められる。この法はバラモンだけでなく、全てのヴァルナに関係する救済の手段となっており、したがって、この法によりヴァルナ社会の内部崩壊が防がれている。

最浄であるバラモンは、日常生活において常に汚れには細心の注意を払う。しかしそれでも不浄物と接触してしまうことはあるし、また慣習に反する行為、あるいは犯罪行為によって汚れを受けることも生ずる。そういうバラモンを全て追放していたのでは、バラモン・ヴァルナそのものが硬直化し弱体化を招くことになる。自分らのヴァルナを維持するためにも落ちこぼれた者を救わなければならないが、汚れたままで抱え込むのでは全体の地位の低下につながる。そこで一旦は追放し、浄化儀礼を行かせたあとで再び元のヴァルナに迎え入れる。この「浄化儀礼」は、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラにも同じように適用され、本来の浄性を失った者を救済する機能を果たしている。

このような「混血理論」・「窮迫時の法」・「浄化儀礼」などの工夫によって、理想と現実の溝が埋められている。ヴァルナ社会の大枠を維持し、その崩壊を阻止する役目を果たすような理論がバラモンによって編み出され、大いに利用されているのである。

第6は「変質による現実対応」についてである。これまで記したように、バラモン・ヴァルナは非常に柔軟な対応で自らの生計を確保し、社会的な地位を保ってきた。このように非常に柔軟な現実対応は、彼らの宗教の歴史の過程でも常に発揮され、その結果、ヒンドゥー教の形

成が進展した。

ヴェーダの時代では、非アーリヤ的な信仰は拒否されていた。例えば、蛇神崇拜、性器崇拜などの信仰は蔑視の対象であった。やがて非正統派の仏教やジャイナ教が興ると、正統派バラモン思想は守勢に回り、退勢を挽回するためにその大衆化を進めることになる。バラモン教のパンテオンの中に排除していた神々を受け入れる形で、非アーリヤ的な信仰を受容し、そのようにしてヒンドゥー教が徐々に成立していく。

この間、バラモンは譲歩・受容しながらも、司祭職を独占し、ヒンドゥー教徒の中の最高位を維持するという、非常に柔軟な姿勢で対応をしている。またこれが結果的に、周辺民族のヒンドゥー教化を進めることになるが、この点でもバラモンの果たした役割は大きいと言えるだろう。

第7に「バラモン・ヴァルナの柔軟性」についてである。バラモンの中には現実には、農業に従事している者や商業に従事している者がおり、また浄性の高い者から低い者まで多様である。さらにバラモン・ヴァルナの中は多くのサブカーストに分かれ、その中でも上下関係がある。しかしいずれに属する者も自らがバラモンであるという帰属意識は強く、それに支えられてバラモン・ヴァルナは存続してきた。

概念的に言えば、バラモン・ヴァルナの中心には「バラモン＝最浄」という観念が不可侵の中核として存在し、厳格に守り続けられている。その周りを多様なバラモン達が幾重にも層を成して取り囲み、周縁へいくに従って浄性は低下していく。一番周縁部には、非アーリヤとの接触を持つバラモンが存在する。このような構造のもとで、外から受けた衝撃は周縁部に吸収され、中核の部分には達しない。中核の部分は不可侵のものとして維持され、2千年以上にわたるバラモンの地位の維持を可能にしてきたのだろう。

非アーリヤとの接触を持つ周縁部のバラモンは最も浄性が低く、エリートである中心部のバラモンからは蔑視の対象になっている。だが彼らこそが非アーリヤ民の編入に大きく寄与し、ヒンドゥー教の形成や、ヒンドゥー社会の拡大に非常に大きな役割を果たしてきた。このような「上からのアーリヤ化」が徐々に進行し、5つの大きな枠組みをもったヴァルナ社会が亜大陸のほぼ全域に形成されていった。

最後に地域名からアーリヤ化を追っておこう。『マヌ法典』には「ブラフマーヴァルタ」「ブラフマルシデーシャ」「マディヤデーシャ」「アーリヤヴァルタ」という地域名が出てくる。「ブラフマーヴァルタ」というのは「ブラフマンの地」であり、リグ・ヴェーダの時代のパンジャブ最東部を指している。ここは最も清浄な土地であり、佳き人々の慣習の守られ

ている土地、正統派バラモンの最浄の地である。

「ブラフマルシデーシャ」すなわち「バラモン聖仙の地」はガンジス河上流域であり、『マヌ法典』では「この地で生まれたバラモンに従え」と記されている。この地は、浄・不浄の観念から言っても「ブラフマーヴァルタ」に匹敵する浄性を持っている。

「マディヤデーシャ」すなわち「中国」の指し示す範囲はさらに拡大され、北はヒマラヤ、南はヴィンディヤ山脈、東はガンジス・ヤムナの合流地、西は現在のデリーあたりまでが含まれる。ここまでが正統派バラモンの故郷に相当する。

ただし、『マヌ法典』の時代になるとアーリヤの住むことのできる土地はさらに拡大することになる。「アーリヤヴァルタ」すなわち「アーリヤの住地」は東西の境界が大海にまで拡大され、北インドのほぼ全域に広がっている。最終的にここまでが正統派バラモンが供犠を行うのにふさわしい土地である。それ以外は「ムレッチャ（蛮族）の住む土地」とされてきた。

時代が下り4、5世紀以後に書かれたプラーナ文献になると、「パーラタヴァルシャ（バラタ族の住む地）」という地域名が出てくる。この地名は本来バラモン文化の故郷を意味していたが、プラーナ文献の段階では南インドも含めたほぼ亜大陸全域を指して用いられている。これは別の言葉で「カルマプーミ」すなわち「行為のなされる土地」とも表されるが、この行為は宗教的行為であり、「バラモンの指導する祭式の行われるのにふさわしい地」という意味になる。「カルマプーミ」に住む人間だけが、佳き行いによって来世の幸福が保証され、あるいは解脱を達成するのであるという。

このような地域名から、パンジャーブ・ガンジス河上流域というバラモン文化の故郷にはじまり、最終的にはインド全域にまで広がるヒンドゥー社会の地域的な拡大を読み取ることができよう。